
殺人貴と魔法使い

殺人貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人貴と魔法使い

【Nコード】

N4778Y

【作者名】

殺人貴

【あらすじ】

満月の夜。月の光に照らされて、彼は現れる。包帯で顔を隠し、ナイフで異形のものたちを刈るその正体は 『殺人貴』。その蒼き瞳に写るのは敵か、それとも 「教えてやる。これが…
…ものを殺すってことだ」

プロローグ

「……何処だ、ここ」

目覚めると自分は見覚えのない場所にいた。辺り一面黒で、闇に染まっている。

……どうしてだろうか？ こんな場所知らないのに、見たことないのに。

だが、何処か漠然とした意識の中で自分は、此所を知っていると思った。

「やあ、目覚めたかい？」

声が響く。それは子供にも老人にも聞こえ、男にも女にも聞こえる不思議な声。

そんな声が、何処からか聞こえてきた。

「……誰だ？ 何処にいる？」

「……？ 何を言っているだい？ 最初から君の目の前にいるじゃないか」

「なに……？」

おかしい、そんな筈はない。確かに自分は誰もいない。何も存在してない！

「な、ガア……ッ！！」

頭に頭痛が走る。痛みで眼を開くのが困難になる。けど、確かに

見えた。

あれはヤバい。何がヤバいのか、それ事態予測がつかない。ただ、はつきし言えることがある。

あの、目を背けたくなるような存在しているのに存在していないモノの正体は

「初めてましてかな？ 僕の名前は『 』。よろしくね」

そう、『 』は告げた。

「……俺に何のようだ」

気付けば口調は荒くなっていた。それもそのはず。確かに自分はいさつきまで家にいたはずだ。それなのに、どうしてこんな所にいるのだろうか？

「うん、いいね。僕の正体に気づきかけながらも、その姿勢。実際に気に入ったよ」

「……いいから答える。なんの真似だ」

そう言っただけ目の前の何か 『 』を睨み付ける。それが何であるのか、まったく予想出来ない。いや、あれは無など程度で表せる言葉などではない。もっと恐ろしい、何か。

「うん？ 君が此所にいる理由だったね？ 単に娯楽だよ？」

「……娯楽？」

どういう意味だ？ そう思い、首を傾げる。
それを見た『 』は愉快そうに声を震わせ、

「そう、娯楽。暇で暇でしょうがなかったから、君を見付けた。君を呼んだんだ、此所へ」

「……暇潰しだと？ ふざけるな。人を何だと思ってやがる」

「じゃあ一つ聞くけど、君は自分のことを特別だとも思っているのかい？」

「……なに？」

その質問に、沸き上がってきた怒りが動きを止める。自分が特別かだと？ そんな筈はない。自分は特徴のないただの一般人だったのだから。

「ほら見なよ。人間なんて、世界に山ほどいる。その内たった一人がいなくなっただとところで別にどうでもいいだろう？」

そう、『』は楽しそうに笑う。……ああ、そうか。こいつの正体は

「どうせ、生き物なんて何時かは死んじゃうんだから」

死、そのものだ。

それを理解した瞬間、身体が硬直する。背筋が凍り、息が苦しくなる。

怖い、此処にいるのが怖い。今さらになって気付いた。此処は、誰も生きてなどいない。全てが死んでおり、自分だけが生きている。

その違和感に、吐き気が込み上げ、頭がフラフラする。

「…………お前は…………」

「ん？ ああそうか。やっと僕自身を見たのか。わかつちゃったんだね、僕がどういう存在か」

『』は笑う。楽し気に、無邪気に、そして…………本の少し、悲しげに。

「さて、僕の正体がわかったところで話を進めようか。僕は今、凄い暇だ。メチャクチャ暇だ。どんぐらい暇かって言ったら、今すぐ全人類を滅ぼしたいくらい暇だ」

「例えが怖えよ」

思わずツツコンでしまう。どんな例えだそれ。しかもコイツならその程度やりかねん。

「んで、最近流行りの転生でもして遊ぼうとしたら

「…………俺が選ばれたと」

…………なんだそりゃ、マジねえよ。何その自分勝手。そんなのに俺を巻き込むなよ。とりあえず、元の世界に…………は、無理そうだな。頼んでも断りそうだ。

仕方ないと諦め、溜め息が溢れる。

「…………んで？ 俺を何処の世界に飛ばす気だ？」

「ん？ それはね…………」

ガチャンッ！！

「…………ガチャン？」

突如そんな奇妙な音が響き渡り、嫌な予感が脳裏を駆け巡る。恐る恐る床を見ると、そこには何と 床が存在しなかった。

えーと……ひよっとしてこれって……。

「行けば分かるよ」

「やっぱりかあああああああああああああああああああああああああッ！！」

声が叫びとなって響き渡り、身体が闇へと引き摺りこまれていく。闇に薄れていく意識の中、『』の楽しそうな声が聞こえてきた。

「君には特別に、彼と同じ力をあげるよ。最強の眼に、それを使いこなす技量。魔を滅ぼす一族の体術に、刃物を使いこなす才能。オマケに回復能力に特化した身体もプレゼントだ。さあ、見せてくれ。新祖の姫を守り、神様すらも殺せる力を持った少年よ。君の名前は」

『 殺人貴 』

(……なんでさ)

そして、俺の意識は無くなった

少年の朝

手を伸ばす、前へ。もっと、前へ。

目の前から居なくなってしまった最愛の人。その黄金に輝く髪と同じような美しい笑みを浮かべ、夕焼けの日と共に姿を消した。

『好きだから、吸わない』

「……ふざけるなよ、あのガンコものっ」

少年は誓う。その掌を真っ赤な血が出るまで握り締め、呟くような声で心に誓う。

「……待ってるよ、アルクエイド。例えお前が何処にいようと、俺は必ず見つけ出す。お前が何時までも寝ているなら、俺が叩き起こしてやる。約束だっただろ？ お前を殺した責任は、ちゃんと取ってやる。だからさ」

手を伸ばす。空へ空へ、黄金に輝く月に向かって。今は届かないとしても、何時かは必ず掴んでみせる。

「……待っていてくれ。ほんの少し、ひと休みしといてくれ。そしてたらさ、俺が君を起こしに行くからさ」

そう少年　遠野　志貴は心に誓った。

『 貴 起き ださ 』

声が、聞こえる。誰かが自分のことを呼んでいるような、感覚。

まるでその声は子守唄のように心地好く感じる。意識が寝惚けている。

『 志 早く 遅刻 あげ 』

ユサユサと揺らされる。それがまた絶妙な加減で、意識がまた沈んでいく。

ああ、もう一眠りして

『 ……すみません志貴さま。失礼します』
「 え? 」

嫌な予感がした次の瞬間

ビリリイイッ!!

「 ギャインッ! 」

突如襲いかかってきた衝撃に目を覚ました。

「えっと……茶々丸？ 確かに起こしてくれって言ったけど……」
の起こし方はないんじゃないかな？」

「ですが、何度も起きるよう言いましたよ？ それに、昨日志貴さまにどうしても起こしてくれと言われたのですが……」

「あ……えっと、その、ごめん。俺が悪かったよ」

俺は学生服に着替え終わると、横にいる茶々丸と共に皿を並べていく。

俺は基本朝に弱い。”この身体”が原因か知らないが、下手をすれば一日中寝てしまうこともある。

しかしこの家に住んでいるのは三人（一体？）もいるので、正直茶々丸一人ではしんどいはずだ。

まあ本人は『ロボットなので大丈夫です』の一言なんだけど……。流石に茶々丸一人では大変そうなので、少しでも早く起きて手伝おうとするのだが

「やっぱり朝は苦手だな……」

「そうでしたら、もう一眠りして来たらどうでしょうか？」

「ああ、大丈夫だよ別に」

俺は欠伸を殺し、下がろうとする目蓋を開きながら朝食の準備を進める。

……台所で準備する若い男女。ふむ、もしもこの光景を第三者が見たら

「……？ どうしたのですか？」

「いや？ ただまるで新婚さんみたいだなーって思っただけだよ」
「ッ……！」

「……ん？ どうしたんだろうか？ 何時もならここでツッコミが入るんだが。つてかあれ？ 茶々丸何だか少し赤く見えるのは俺の気のせいかな？」

「いいいや、そそその、あああの、で、出来ればマスターを呼びにいい行つてくくれませんか」

「……いや、噛みすぎだろおい。まあいいけどさ」

俺は噛みまくる茶々丸を心配しながらも、言われた通り家のマスターを起こしに行く。

「……志貴さまは卑怯です」

いや、何でだよ。

「おーい、朝だぞー。さっさと起きろー」

コンコン、と、ドアをノックして挨拶する。しかし、中からの返事はない。

「……まだ寝てんのか？ しかたないなー」

俺は更に二回ほどノックした後、起きる気配を感じとれなかった

ので扉を開けることにした。

「おーい、エヴァ。朝だぞー」

「うん……………」

そこにいたのは一人の少女。見た目は十歳ぐらいだろうか？ 金色に輝く彼女の髪は、ある女性を連想させた。

(……………アルクエイド……………)

頭で違うと分かっているけど、つい考えてしまう。この気持ちは”この身体”の持ち主であり、俺の気持ちではない。

分かっている。分かっているけど、どうしても考えてしまう。

真祖の吸血鬼。

二人の姿が、重なっているように見えた。

「……………」

俺はそつと、彼女の横に座る。規則正しい呼吸を繰り返す彼女の前髪を払う。

エヴァンジェリン・マクダウエル。

真祖の吸血鬼にして、悪の魔法使い。何百年と生きる彼女は、やはり何処かアイツに似ていた。

「……………俺は、ひょっとしたらそれだけでコイツの側にいるかもな」

そんな、自虐的な笑みを浮かべる。俺は、俺の本当の気持ちは

「うん……………」

そうやって悩んでいると、ふとエヴァの瞳が開く。寝惚けたように視線をあちこち回ると、俺を見た瞬間ピクリと止まった。

「やあエヴァ、おはよう」

「……………」

俺が挨拶してもエヴァは何の反応もしない。…………うん？ どうしたんだ？

「お……………ッ！」

「お？」

「お前は人のベッドで何をしとるか　ッ！！」

「ええっ！？　ちょ、待ってギヤアアア　ッ！！」

理不尽だ、そう俺は呟いた。

「ふん……………ッ！」

「いい加減機嫌を直してくれよエヴァ……」

現在、俺たちは朝食を食べていた。エヴァは怒ったように顔を背けて、茶々丸は無言のままジツと棒立ちし、俺はエヴァに今朝のことをずっと謝っていた。

本来ならここにもう一人いるのだが、今は置いておこう。

「エヴァ、悪気があってやったんじゃないだよ。あれは事故というか何というか……」

「……ほう？ つまり自分は何も悪くないだど？」

「すみませんでした。だからその殺気は勘弁してくれ」

……やれやれ。今のエヴァには何を言っても無駄のようだな。仕方ない、また帰って来たら説得することにしよう。

俺は溜め息を吐き、掛けてあった鞆を取り出し玄関に向かう。

「悪い。今日少し用事があるから先に行ってくるよ」

「む？ 待て志貴！ 話は終わって」

「ああ、そういえば志貴さま。『アルクェイド』とはいったいどちら様のこと何でしょうか？」

その瞬間、空気が凍った。

「……えっと、茶々丸？ いったい何のことだい？」

俺は震える手で取っ手部分を掴みながら、恐る恐る茶々丸に聞き直した。

「いえ、ただ朝に寝言でそうおっしゃられていたので、疑問に思っただけです」

……嘘だ、絶対嘘だ。だって笑ってるもん。何故か俺には薄い笑みを浮かべているようにしか見えないけど。

ただ今俺は極寒の真冬にいるような感覚をしていた。……ちなみに言っておくが、これは比喩ではない。

「……ほう？ 詳しく話を聞きかせて貰おうか」

そこには、一人の女王が君臨していた。手元にある数少ない魔法薬を取り出し、最大級の殺気をぶつけてくる金髪の吸血鬼。

その瞳には、はつきしと逃がさないと書かれている気がした。

……茶々丸ううううううううううううううううッ!? お前絶対これを狙って言ったよな!? お前は俺を殺す気がッ!

……とりあえず、俺に出来ることは

「……戦略的撤退ッ!!」

俺はすぐさま扉を開き、外へと最大速度で駆け出した。

聞こえない。後ろから「志貴 ツ!! 貴様後で覚えておれ

ッ!!」とか、「志貴さま、先程のお返しです」とか、全然聞こえないんだから……!!

聞こえないんだ

ッ！！

これが、俺

明石^{あかし}

志貴^{しき}の、朝の風景である。

少年の放課後（前書き）

主人公の名前変えました！

読者の皆さん……今回はどつどつどしょつか？

少年の放課後

夢を見た。まだ『俺』が、『僕』だった頃の夢を。

月がとても綺麗に見える夜。けど、そんな美しい光が微かに思えるほど、辺りは眩しかった。

木が、村が、森が、燃えている。

人が、友達が、家族が死んでいる。

鬼が、化け物が、異形のものたちが、殺してくる。

ついさつきまでは何時も通りの夜だったのに。何時も通りの朝を迎えられるはずだったのに。

みんな死んでいる。手足は引き千切られ、身体中から真っ赤な血を吹き出し死んでいる。

そこはもう、血の海になっていた。

自分はただ呆然とするしかなかった。何が起きたのか分からない。けど、一つだけ分かることがある。

ああ、僕も死ぬんだ。

もうみんな、僕を除いた全ての村の人々が殺された。もう誰も、動かない。

残っているのは僕一人。つまり……僕を殺せば、全てが終わる。

『 、 』

ゆっくりと、鬼たちが近付いてくる。近くに寄るだけで、並みの鬼からは感じられないほどの力を感じる。

『 、 』

鬼たちは何かを言っている。けど、それを頭が聞き取るうとしない。けど、何故か謝っているように見えた。

ゆっくりと、鬼の持っていた剣が振り上げられる。その剣は、僕に向かって振り下ろされ

次の瞬間、後ろから光が飛び出してきた。

何十本もの光の弾丸。それは剣を振り下ろそうとした鬼にぶつかり、吹き飛ばした。

それと同時に、森の奥から何十人もの杖を持った人達が現れ、すぐさま謎の光を出して鬼たちに攻撃した。

一瞬で始まった戦争。僕はその光景を、何処か別世界の戦いに感じて、我も忘れて見とれてしまった。

『 大丈夫！？ 怪我してないッ！？ 』

すると、最初に突っ込んで来た女性が、すぐさま僕のところに駆け込んで来た。

彼女は本当に心配したように、息を切らし、涙を流しながら僕を抱き締めた。

……？ 何故彼女は僕を抱き締めているのだろうか？ 何故、彼女は僕の心配などしているのだろうか。何故

こんなにも、暖かく感じるのだろうか？

『 さあ、早く逃げるわよ！ 君の名前は？ 』

彼女は立ち上がると、僕の手を掴み、全速力で走り出した。

……分からない。いきなり色んなことがあって、頭が混乱している。けど、確か、僕の名前は

『 七夜。七夜ななせ 志貴しき 』

それが僕……いや、俺の運命の始まりだった

「……おい明石、起きろ明石ッ!!」

「はッ!?!」

ふと、声を掛けられ俺は目覚めた。寝惚けた眼を擦りながら辺りを見回すと、外は夕焼けになっていた。

俺は……寝ていたのか……?

「まったく……君は朝からずっと寝ていたぞ?」

すると俺を起こしてくれた先生　　ガンドルフィーニ先生は、溜め息を吐いた。

ガンドルフィーニ先生。

黒色肌で、同じような黒髪で、現在妻と娘の三人家族で住んでいる先生。蛇足だが、眼鏡は必要ないと思います。

……って待てよ? それじゃあ

「あれ?　じゃあとっくの昔に……」

「ああ、授業は終わっている」

……おい、何で誰も起こしてくれないんだ。普通授業が終わったら起こしてくれるだろ？

「すみません、それでは」

俺はすぐさま鞆を手に取り、下校しようと立ち上がり

「まったく、君は何時も寝ていてばかりで……だいたい、授業が終わるまで寝ていること事態がおかしい。君には生徒としてのやるべきことを理解していないッ！！ だいたい君は って明石！？ 待ちなさい何故走り出しているんだ先生の話を聞けッ！！」

逃げた。割と全速力で逃げたした。べ、別に先生の話が長いから嫌だとか、そんなんじゃないんだからな！？

「ふう、此処まで来れば大丈夫かな……？」

現在俺はあの先生から逃亡して、近くにあつたベンチに腰をかけていた。

「……それにしても、懐かしい夢を見たな……」

あの頃の夢を見るなんて、何年振りだろうか？ ずっと覚えていて、ずっと忘れていた。『俺』の始まりであり、『僕』の終わりを告げた日。

そう、あれは確か

「あ、志貴じゃーん！」

「……ん？」

一人ぼーっとしてしていると、ふと後ろから声を掛けられた。振り返るとそこにいたのは、ユニフォームを着て笑顔が似合う少女だった。

「裕奈か。何だ？ 部活か？」

明石^{あかし} 裕奈^{ゆうな}。

麻帆良学園中等部、2年Aクラスの少女。明石先生の娘であり、そして

「何だはないでしょ”お兄ちゃん”」

「……頼むからそれはやめてくれ。お前に言われると鳥肌がたつ」

「ちよっ、それどういう意味ッ!？」

俺の家族である。

明石 裕奈と明石 志貴。

そう、俺は昔、明石家の養子として引き取られた。なので、裕奈とは義理の妹という関係になっている。

……と言っても、同年代だからどちらが上とかまったくどうでもいいんだが……。

「何よー、私が妹なのが不服なわけー」

ブーブー、と、口を尖らせ文句を言う裕奈。……まったく、そんなわけないだろ？

「裕奈は可愛いんだから、そんなわけないだろ？　ただ、俺とお前は同じ年なのにそう言われるのが嫌なだけだよ」

まったく、同じ年に”お兄ちゃん”って呼ばれるなんて何の冗談だ。まったく笑えないな。……って裕奈？

「か、かかかか可愛い………ツ！？」

どうしたのだろうか？　裕奈は何時も元気な表情とは一転し、顔を真っ赤に染めていた。

何だ？　もしかして照れているのか？　……それはないな。だって親父さん一筋な裕奈だし。

「え、えっと、その……あ、あれだ！　ぶ、部活の続きもあるし、

私もう行くね！　じゃあッ！！」

ビュンッ！　と、まるで風の如く裕奈は俺の全速力をも越える速さ
で去っていった。

「……………何だったんだ？」

数秒間、俺は呆然のあまり動けなかった。

「しかし、妹か……………」

誰もいなくなった広場で、俺はそう呟いた。

眼を瞑る。するとそこに思い出されるのは裕奈……………ではなく、長い
黒髪の少女。

「『秋葉』……………」

気付けばそう呟いていた。これは俺の記憶ではない。俺の感情では
ない。

”遠野　志貴”の記憶。

記憶から引き抜かれる情報に、彼女のことがあった。大切に、自分
の守るべき家族の一人。

けど、最後まで一緒にいらなかった。自分は、別の彼女を選んでしまった。

後悔はしていない。けど、叶うなら

「……………ぐうツ！！ お、俺は……………！」

頭が痛い、頭が混乱する。魂が、”遠野 志貴”に書き換えられる。記憶に持っていかれそうになる。

違う、俺は俺だ。”遠野 志貴”なんかじゃない。俺は、俺はツー！！

「……………はあ、はあッ」

……………もう大丈夫、何時も通りの俺になった。

俺は息を切らしながら立ち上がり、ゆっくりと家に向かった。

大丈夫、大丈夫だ。俺は俺だ。だから大丈夫……………だよな？

そんな、自分自身に不安を抱きながら、ゆっくりと

……………ちなみに。

「フフフフッ。さて、今朝の話の続きをしようじゃないか……
ッ……！」

「……………あ、忘れてた」

家に帰って俺に待っていたものは、極上の笑みを浮かべる吸血鬼だった。

その後のことは、話すべきではないだろう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4778y/>

殺人貴と魔法使い

2011年11月21日12時21分発行